Deep　Rain

氷河つらら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｄｅｅｐ　Ｒａｉｎ

【Ｎコード】
Ｎ６０６９Ｙ

【作者名】
氷河つらら

【あらすじ】
雨が止まることなく降りしきるブルータウン。
そこには特殊兵士学校『アルカナ』がそびえ立っていた。ルークは戦争で故郷を追われ、アルカナにやってきて、長いこと過ごしていた。いつものように生徒の１人、カイとの試合に応じながら――だが日常生活はゆっくりと変化の兆しをみせていく。物語は、そこから大きく波紋を広げる。
※携帯サイトにて掲載中作品になります。サイトでのユーザー名は別名になります。

序章：試練の始まり（前書き）

※この物語はフィクションです。

序章：試練の始まり

何故、生きる……？

どこに向かって、進む？

どうして、出会ったのだろう——

＊＊

ブルータウン——

ほとんど雨が降っていて、雲の隙間から陽光が覗くことはあっても、それは僅かな時であることが多い。

その雨に囲まれているように、ブルータウンには、特殊兵士学校『アルカナ』が建っていた。

アルカナの講堂で、ルークは窓越しに雨を見つめた。もう少しで、雲の裂け目が増えそうだった。

「で……何だっけ？」

ルークは窓から視線を滑らせた。紺色の髪と同色の瞳の自分の姿

の後ろの方に、もう1人姿がある。
銀髪に青目――どこか儚ささえ漂う青年、カイだ。

「霧の森で待つ」

カイの言葉に、ルークは眉をひそめた。
「暇だろ、どうせ」
ルークは考える。
「なんでまた、霧の森？」
カイは面倒くさそうに視線を泳がせた。
「来れば分かる」
聞き返す暇もなく、カイはさっさと講堂の入り口に向かった。
ルークは肩をすくめた。制服を脱いで着替えなきゃ、洗濯が大変そうだった。

講堂から出て、ルークは広場の中央を横切る。取って付けたようなツギハギな色の通路を歩いて、寮に向かう。
途中、よく知る女性――ユイに目が止まった。ルークが言うのもなんだが、彼女のスタイルは際立っていてスレンダーだ。

「待ってた。今、暇でしょ」

みんな、俺をそんなに暇な人間とみているのか？　とは口に出さなかった。
「残念だが、暇じゃない」
「え？　講義無いでしょ？」　ルークは歩みを進めた。
「出かけるんだ」
「どこに？　何しに？」
「関係ないだろ」
「いつ帰る？」

ユイの言葉にルークは足を止めた。帰る時間なんて決めてなかった。
「……夜、までには」
「まさか、出かけの用事ってカイじゃないでしょうね」
ユイはルークの顔をじろりと覗きこんだ。
「関係ないだろ」
ユイはしばらくルークの顔を覗きこんでいたが、やがてため息をついた。
「じゃあ、夜でもいい。帰ったら呼んでね」
「気が向いたらな」
「絶対。幼なじみの頼みくらい、聞いてよね」
ユイは、ほんの少し満足したように離れた。

幼なじみ――その言葉は、何回も聞いているが、こうして考えるのは珍しい。
故郷のグレスシティが戦争の被害を受けてから、ルークがブルータウンまで流れついたのは、大体13年前になる。
その間、ルークとユイは別々の道を辿り、そして同じ場所に辿り着いた。
それはある意味では奇跡だったのかもしれない。
ユイはその事をとても喜んだ。だが、ルークは素直に喜べなかった。境遇があまりにも、違いすぎた。

「……」

ルークは黒い革のジャケットを着込んだ。一応、撥水加工されていて、防弾仕様だ。剣の状態もしっかりみて、アルカナの外へ出る。
アルカナから北の森、雨が地面に落ち、跳ねて、周囲に曇りの膜を作る――霧の森と呼ばれる所以だ。

森の入り口に足を踏み込んで、小さくため息をつく。
――ここに、何があるんだ？

足を進めて行くと、ルークは背後に気配を感じて立ち止まった。
右手で持った剣を振り替えることなく、自分の背後に突きさす。
グル、グルと喉を鳴らして獣が倒れこんだ。
赤い目と昆虫のような鋭く長い角――『影（シャドウ）』だ。

どこもかしこも、影だらけだ。

森の奥深くと思われる、霧に見え隠れする泉を目にやって、ルークは足を止めた。

「……そろそろ、いいだろ」
ルークは辺りに目をやった。

「カイ！　出てこい！」

霧がほんの少し乱れた。
その霧の中から、カイがゆっくりと顔を出す。
「ここまで来たんだ。そろそろいいだろ」
ルークは剣を構えた。
応対するように、カイもまた、剣を自分の目の前に翳す。
何も言わなくても、もう慣例のようになっていた。
ルークが動いたのと、カイが動いたのは、同時だった。風を切って、剣と剣がぶつかり合う。
ルークの剣より何倍も細い刀身は、ルークの剣を弾いて肩の上に伸びた。
「くっ……！」

返すようにルークはカイに向かって剣を振る。
だが、カイは霧に紛れるように後方に飛んで掻き消えた。
ルークは動きを止めた。神経を研ぎ澄ます。
ひゅう……っと微かな風が、ルークの首筋にかかった。
「……降参」
ルークは両手を上にあげた。カイはルークの首にあてた剣をゆっくり降ろして、ため息をついた。
「なんだかいつも加減してないか？」
ルークは苦笑いを浮かべる。
「冗談。俺は、全力でも負けるんだ」
カイはあまり納得いかないように、視線を遠くにやった。
「あれをみても、その調子でいられるか？」
ルークは振り返って、カイの視線の先を追った。
「な……！」
ルークは思わず言葉を呑み込んだ。
霧の先から、大木のような太さの腕が姿を現す。
思いきり裂けた口元、樹の枝の角――明らかに人間ではないものがいた。
だが、これは『影』でもなかった。
「まさか……『領主』！？」

『影』は、戦争で失われた生き物の念が生み出した、異形の化け物だ。
だが、稀にその『影』たちの中心に一際大きな念――巨大な影が存在しているのだ。
領土を統率する影――『領主』。

だが、ブルータウンでは『領主』は確認されていなかったはずだ。
「カイ！　どういうことだ！　なんでここに『領主』がいる！？」

カイは平然と、
「それより、早くなんとかした方がいいんじゃないのか？」

ルークは表情を固めた。
「冗談じゃない……！」
『領主』と戦う術などルークにはない。『領主』は『影』とは比べものにならないくらい強いのだ。
それはルーク自身がよく知っている。
領主は金切り声をあげた。その声にルークの体に鳥肌が立った。
大木の腕がルークに容赦なく向かう。
ルークは素早く飛び上がった。
腕の衝撃で、ルークの視界が粉塵に覆われ、一瞬怯んだ。

「う……っ！」

ほとんど反射的に、ルークは体を屈めた。
だが、予想に反して素早い領主の腕が、ルークの左肩に衝撃を与えた。
ルークはバランスを崩して転がった。

――まずい……！

だが、動き出した領主の腕が急に赤い光に包まれた。かと思うと、光は盛んに領主の腕を呑み込み、燃えあがる。
カイの魔法だ。

「期待外れだな。剣がダメなら、魔法を使えばいい話だろう」

「俺は……！　魔法は使わないっ！」

『魔法』――それは、自分の念を体外、あるいは体内に放出する技術だ。
アルカナでも魔法の講義や訓練は行われている。
だが、ルークは魔法を激しく拒絶している。

「勝手にしたらいい」

カイは肩をすくめた。
「俺は一足先に、アルカナに戻る。生きていたら、また会おう」

カイは身を翻した。
ルークが立ち上がりかけると、領主の体から伸びた樹の枝がルークの足に絡みつき、引っ張りあげた。
「うぐ……！」
ルークの体がまるで操り人形のように、左右に引きずられていく。
思いきり腕を降って、ルークは剣で樹の枝を裂いた。瞬間、ルークの体は霧の中に向かって投げ出された。
「……」
視界がパズルのようにかちりと取れて揺れる。
ルークの腕から血が滲んだ。

霧の中を惑うことなく、領主はルークに向かって走った。
ルークは悔しさに唇を噛んだ。

領主の腕がルークの体に触れた瞬間、ごぉっと辺りを包む轟音と共に、領主の体が炎に焼かれた。
ルークの瞳の奥が赤くなる。
「使わない」と言ったはずの、ルークの魔法だった。

領主の体はみるみる崩れ落ちていく。
降り注ぐ雨は慰みにもならなかった。

「くそっ……！」

ルークは悔しさに悪態をついた。
それは誰に対するものでもない、自分の無力さに対してのものだった。

序章：試練の始まり

アルカナの寮の一室では、風呂からあがって着替えを済ませたユイが、ルークの帰りを首を長くして待っていた。

「まだかな……。ルーク」

一体、何をしているのだろう。

いつも用事の無いときはルークは訓練所か図書館、あるいはカイと試合をしている。

試合のほとんどはカイが誘って、ルークがそれに乗っている。

ユイには、何故ルークがいつもカイの誘いに乗るのかがさっぱり分からない。カイは何を考えているのか分からない男だ。

カイが他の生徒と喋っているところをみたことがないし、一匹狼で話さない。

それなのに、ルークはいつもカイの誘いを断らない。

幼なじみなのに、自分にはルークのそんな考えも分からないのだ。

「はぁ……」

ユイは、なんだかそんな自分が情けなく感じられた。

「もう、遅いっ！」

ユイは勢いに任せて立ち上がり、グローブをポケットに突っ込む。

少しイライラを発散させようと思ったのだ。

寮の廊下を闊歩すると、「お」と声をかけられた。

金髪の長身――バランだった。

「一緒じゃなかったんだな、ユイは」

バランの言葉に、ユイは眉をひそめた。

「何の話？」

「あれ？　知らないの？　ルークが校長に連れられて保健室いったって聞いたんだけど」

「え？」

「またなんかやらかしたのか？」

ユイは表情を固めた。考えるよりも体が先に動いて、気づいたら駆け出していた。

寮の廊下を出てつきあたり１２歩――も吹っ飛ばして、思いきり保健室の戸を開けた。

「ルークっ！」

目を丸くした校長の顔と、無表情のルークの顔が目に入る。

ルークは黙って腕に包帯を巻かれていた。顔や体も擦り傷がたくさんみえる。

「丁度よかった。答えてもらえるかな？」

口調は穏やかだが、眼光は鋭い、校長の言葉がユイに向けられる。

「ルークは傷だらけで外から戻ってきた。どこに、何をしに、誰と行ったか聞きたい」

校長は「誰と」を強調した。

ユイはちらりとルークをみやった。ルークは答えることなく、一瞬だけユイに視線をやった。

「私は……分かりません。ルークに聞いてはどうですか？」
「彼は答えないのでね」
校長の顔に呆れたような感情がよぎる。
「やっぱり答えるつもりはないのだろう？　ルーク」
「……」
ルークは黙っている。こうなると、ほとんど黙秘だ。
校長はため息をついた。
「2人とも、今日はもう休みなさい。ルーク、改めて明日聞くから、今度は答えてくれ」
校長は保健室の扉に手をかけながら、ちらっとユイの顔をみやる。
彫りの深い顔に、鋭い眼差しだった。ユイには何度みても慣れない。

ユイはルークの側に寄った。ルークは擦り傷のついた顔をあげた。
「……約束」
「え？」
「まだ……有効だろ」
ルークは掛け時計に目をやった。ユイもつられて目をやる。
「ああ……。それは、いいんだけ、ど」
ユイは幾重にも巻かれては外された、血のついた包帯を目にして、言葉を枯らした。
今までも幾度か怪我をして保健室に来ることはあったが、こんなにひどい怪我をしてきたのは初めてだ。
「ねえ、ルーク……」
「それで、用事って？」
ユイの言葉はルークの言葉に遮られた。
「う、ん。別に……いいの」

ルークは不思議そうな顔でユイをみやった。
「カイと一緒にいたの？」
ルークは何も答えなかった。こうなると、ユイにだって喋らないだろう。
「俺は……休むよ」
ルークはユイの返事を待たずに保健室に横になった。誰かがいるところで横になるのは珍しい。かなり疲れていたのだろう。
「分かった。じゃあ……早く元気になってね」
この時、ユイにはそれが精一杯だった。何故だろうか。いつもなら、聞けるのに。
今のルークは、ユイさえ知らない別人のように思われた。

ユイが保健室から出ていってから
ルークのすぐ隣でカーテンがシャッと音を立てた。
「先約があったなら、悪いことをしてしまったな」
隣のベッドにいたカイが、つぶやいた。
目を閉じていたカイは、うっすらと目を開ける。
「いつもいつも、お前は俺を言わない」
「……カイ」

「校長は気づいているぞ。もしかしたら、いつもここにいるのもお見通しかもしれないな」
カイは自虐的な笑みを作る。
「別に言っても構わないのに」
ルークは一拍間を置いた。
「アレは……なんだったんだ？」
「霧の森の、『領主』だ」
「そうじゃなく……」
「どう思う？　ルーク」
カイは、ほんの少し声を小さくした。
「『領主』は、本当に、敵なのか？」
部屋が水を打ったように静かになった。
――『領主』は、本当に、敵なのか
だって？
「敵……だろう？」
「何故だ？」
「何故って……」

ルークは言葉に詰まった。何故なんて、考えたこともない。
だって『領主』は、初めから敵だから――
違う……敵、として。
「悪かったな、疲れているところを」
カイはベッドから降りて、保健室のドアに向かった。ルークはその後ろ姿を目で追った。
「カイ……何を、考えている？」
カイは足を止めた。
振り返りそうだったが、振り返らなかった。
「……またな」
カイはただそれだけつぶやいた。

第1章：課題と命題

あの、雨の日――

初めて、ここに来たとき

降りしきる雨は雨ではなくて

涙にみえたんだ――

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊
＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ルークは目を開けた。

夢でみた湿った匂いが、目を覚ました今もまとわりついている気がした。

こつっと頭に衝撃を受けて、ルークは頭をあげる。

「おい、俺とチームだってよ」

ルークのおぼろな視界に金髪の爽やかな顔が、社交的な笑みを作る。バランだ。

バランの言葉に、ルークの頭がフル回転する……が、いまいちよく分からない。

「……は？」

「うん、やっぱり聞いてなかったんだな」

バランは「うんうん」と頷いた。ちなみに「今は講義中だよん」

と呟いた。
「さっき先生がな、２人チームを作って、課題をこなせって言ったの」
「そうか」
「そう。で、早速今日から特別講義つき課題訓練が始まる」
「そうか」
「そう。で、俺とお前が２人チームでやれと」
「そうか」
「そう。てことで理解したか？」
「ああ。じゃあ、チーム変更を」
「なんでだよ、おい！」
ルークは寝ぼけ眼を擦った。
「変更……効かないのか？」
「効かねぇよ！」
ルークは肩を落とす。
「いや……そこまで落ち込まれると、俺も傷つくんだが」
ルークはため息をついた。
「仕方無いな。よろしく頼む」
「おお、なんだ、嫌がってた割に律儀だな。よろしくな」
バランはからからっと笑った。
「早速次の時間、講義だ。このあと向かうけど、一緒に行くか？」
ルークはほんの少し考えこんだ。
「いや……席をとっておいてもらえないか？」
「それはいいけど……用事でもあるのか？」
「ん～、ちょっと校長を撒いてから行くよ」
ルークは素早く立ち上がった。
「じゃ、頼んだ」
ルークは目の前の席を飛びこえて駆け出した。
その行動に、バランや他のものたちが呆気にとられて固まった。
「まだ講義中なんだけどな……。それに次の時間、講義始めに校長

来るから、意味無いぞ」
バランは、自分の頭の中で納得をする。
――やっぱり、あいつは天然なんだな。

次の講義の教室に入ってきたルークは、愕然とした。

「校長が……いる」

バランは思わず吹き出しそうになった。
「さっきの講義の前にも、来るって言ってたじゃん」
ルークは獲物から逃げるように、じりじりと後退りながらバランの隣の席に座った。いつも校長と対峙していても、そこは他の生徒以上に『生徒』らしかった。
校長の鋭い眼差しがルークを捉えた。ルークはそれを真っ向から受ける。
「では、課題講義を始める前に、私から幾つか話をしようと思う」
校長は辺りを見渡す。
「まず、みんな知っての通り、アルカナは戦争によって生まれた『影』、そして『領主』を排除するために出来た特殊な兵士学校だ」
校長は続ける。
「特殊な兵士学校――それは、ただの兵士学校とは違う。その象徴的なものとしてはまず、技術があげられる」
バランは一際大きな欠伸をして、慌てて口を塞いだ。校長と視線があってしまったのだ。
「今回の課題は、その技術を向上させる意義を持つ。技術には当然ながら、魔法も含まれている」
『魔法』という言葉に、ルークの頭の中に数日前の記憶がよぎる。よく考えたら、カイと霧の森に行って3日――その間、校長からも逃げ回っていたのだと考えると、ルークは自分を褒めてやりたい気

分になった。
――いや、今考えると、校長は本気で自分を探していなかった。
その理由は今目の前にいる校長をみれば、嫌でも分かる。
「そして魔法の基は、『影』や『領主』と同じ――紙一重だ。だからこそ、これから言う言葉を、皆に忘れないでいてもらいたい」
校長はそこで一旦、言葉を切って、告げる。

「『領主』は、敵だ――」

校長の視線がルークに突き刺さった気がした。
胸に鉛が落ちた気がする。
「忘れるな。何があっても、『領主』は敵なのだ」
校長はそこで、少しだけ沈黙した。それから続ける。
「それともう1つ。今回の技術訓練が終了したら、各々は地方に赴くことになる。戦場だ」
教室は静まりかえった。
「では、これより講義を始める……が、その前に、ルーク」
「……！」
突然自分の名前を呼ばれて、ルークの思考は停止した。
「講義が終わったら、一緒に校長室に直行だ。いいな」
「う……」
そう言って校長は、講義の間中、背後霊のようにルークの後ろに立っていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6069y/

Deep　Rain

2011年12月1日22時55分発行